

中国的笑い話

津山 幸彦

岡田真澄はスターリンにそっくりだね

「岡田真澄はスターリンにそっくりだね」

これを聞いた日本人は100%くすっと笑う。

日本人は決してこのような発想はしない。思いつきもしない。しかし、思い出せば似ているのだ。

中国人だから思いつくと言える。なぜなら、中国人にとってスターリンは毛沢東と並ぶ偉人として幼少の頃から教え込まれていたのだから。日本人が笑えるのはスターリンという人が嫌悪感すら感じさせない昔の人になってしまっているからではないかと思う。

中国的座敷牢

中国の牢屋はどこも満杯だ。一部屋に10人は普通である。当然、そこにはピラミッド社会が形成される。

江戸時代の座敷牢そのものだ。その頂点に位置する者を通じて囚人の管理が行われている側面もある。大きなトラブルを起こさずにおれば、自分の刑が軽くなる。懲役20年の刑でもいつの間にか懲役3年となり、娑婆に帰れるのだ。だが、その頂点は力づくで勝ち取ったものであり、いつ引きずり降ろされるか分からない。

最初の話。

ある日、新顔が部屋に放り込まれて来た。当然、主はどんな罪を犯したのかを問いただす、刑務所の中では殺人、強盗にくらべず、万引きのたぐいは最も軽蔑される罪なのだという。殺人や強盗をする者は肝っ玉が座っている者が多い、だから一目置かないと、後で頂点の地位を奪われかねないからだ。

新顔曰く「ひもを盗みました」

主 「えっ？」

新顔「そしたら牛がついてきよりました」

主はおちょくられていると気づくや配下に目で合図する。

その夜、消灯後に全員でぼこぼこにしたのだ。

こうして新顔は主に敬意を払う事を身体で教育されるのだ。

(中国では「主」の事をどう表現しているのだろうか?)

二つ目のお話。

腕っ節の強そうな男が入って来た。

中国での食堂では日本の昔の小学校のようにバケツに入れられたおかずを柄杓で自分のお椀に各自が入れて行く。牢主の世話は付き人が行う。牢主が配下に目配せすると全員で新顔をどつき回す。これで新顔は牢主の力を身を以て知るわけだ。だが、その夜、皆が寝静まった時、真っ暗闇の中。新顔が全員の頭を金属製の食器で殴り倒して行った。次の夜、今度は新顔が全員から殴る蹴るの暴行を受けるはめに。しかし、その次の夜、全員、一睡も出来なかった。そして、翌朝の食事。新顔がデンとテーブルに座り、一人の男に目配せする。男は新顔の食事の用意をしてくれた。これで形勢逆転。新顔がトップの地位に。今までの牢主はナンバー2に、と相成った。娑婆に早く出るにはトップにならなければならないのだ。競争社会も牢屋までとはね。

、